

「不定詞付き対格」の 深層構造について¹

加 藤 力 也

1. はじめに

1. I want him to go.
2. I believe him to be honest.
3. I forced him to go.
4. I told him to go.

これらは非常に簡単な英文にすぎないように思われるが、誰でも一度は「いわゆる五文型の枠内で、目的語、補語などの要素に分析するとどうなるのか」と言う学生の質問にぶつかっているのではないかと思われる。そして多分

1. は主語＋動詞＋目的語 (him to go) あるいは人によって、主語＋動詞＋目的語 (him)＋補語 (to go)
2. は主語＋動詞＋目的語 (him)＋目的格補語 (to be honest) あるいは、主語＋動詞＋目的語 (him to be honest)
3. は主語＋動詞＋間接目的語 (him)＋直接目的語 (to go) あるいは、主語＋動詞＋目的語 (him)＋目的格補語 (to go)
4. は主語＋動詞＋間接目的語 (him)＋直接目的語 (to go)

と考えることが出来ると答え²、更にこのような分析よりも、want, believe, tell などの動詞が取り得る全体的な構造を——いわば一つの「不定詞付き対格」の構造として——マスターする方が重要だと注意をうながしたのではないかと考える³。

英語には accusative と言う格はない以上、適切ではないが、便利な名称である accusative with infinitive (不定詞付き対格) の構造が先行の動詞との関係で、上に述べたように解釈されるのは、私達の直観と同時にいわゆる伝統文法 (Traditional Grammar) によってつちかわれた考え方によるものと思われる。この面では Analytic Syntax が翻刻されたりして、特に最近再

評価されている O. Jespersen と10年程前にその *A Handbook of English Grammar* を読んだ時、この問題の扱いで強い印象を残した R. W. Zandvoort の見解を取り上げる。

更に、*The Grammar of English Predicate Complement Construction* をはじめとして、変形文法の枠の中で補文構造の問題に積極的に取り組んでいる P. S. Rosenbaum の考え方を中心に取り上げ、(1) 前二者の分析にどのような客観的な根拠が与えられ、あるいは付け加えられているか、(2) 前二者のいわば説明抜き考え方があますところなく説明されているか、更に(3) 別な説明が必要か考察することによって、不定詞付き対格の構造に対して、一応の深層構造<deep structure>を提案しようとするものである。

なお、標題に上げた「深層構造」と言う術語は *accusative with infinitive* 同様、カッコに入れるべきものである。Rosenbaum はいわゆる標準理論 (Standard Theory) あるいは解釈意味論 (Interpretive Semantics) の立場にあると考えられ、格文法 (Case Grammar) や生成意味論 (Generative Semantics) の立場に較べれば、その深層構造は比較的浅いと考えられるからである。しかし、本稿では興味の中心はあくまでも不定詞付き対格構造の統語論的行動 (syntactic behavior) であり、それによって不定詞付き対格、更に厳密には *noun or pronoun + to - infinitive* を取る動詞を (1) *want*, (2) *believe*, (3) *force*, (4) *tell* の4つのクラスに分類しようとするものである。

2. Jespersen

J. はこの構造を *Essentials of English Grammar* では *infinitival nexus as object* 及び *object of result* として、分析せずに扱っているが、*A Modern English Grammar, Part 5*, 18. 14 ではこの構造に3つの異なる源を与えている⁵。

(a) S + I つまり対格 + 不定詞が明らかに主動詞の直接目的語の場合、

I hear him sing. SVO (S₂I)

cf. I hear his singing.

This caused the apple to fall. SVO^r (S₂I)

cf. This caused the fall of the apple.

(b) 人が動詞の間接目的語で、不定詞が直接目的語の場合、

I allow her to sing. SVOiO (I)

cf. I allow her a hundred pound a year.

(c) 人が直接目的語、そして不定詞が(多かれ少なかれ場所的な意味を持つ) toによって連結された三次語(tertiary)と考えられる場合、

We forced him to obey. SVOpl

cf. We forced him (in) to obedience.

この分類の根拠はすぐ下に与えられている参照文にあると考えてよいであろう。J.は更にいくつかの border-case、つまりどちらの類にも解釈しうる移行段階の例を上げているが、ここでは問題にしないことにする。

(a)として上げられている例文は典型的なものとは言えないように思われるが、18.21よりはじまる記述⁶の中で特に説明のない動詞、want, believe は勿論 see, hear; feel, find; think, suppose; acknowledge; like, hate; wish, desire などは全てここに、特にSVO(S₂I)に属すると解釈されていると考える。

(b)については、let, suffer; command, order; advise, bid; tell, teach; ask, begなどを認めているように思われる。

(c)については、I got him to talkを上げ、compel, oblige, constrainをforceと一群とし、更に induce, urge, persuade など、又helpをここに入れているようである。

なお、(a)のSVO^r(S₂I)については、causeの外にmake, contriveを上げ、(c)の動詞も同様に解釈できると考えているようである⁷。

3. Zandvoort

A Handbook of English Grammar, Chap. 1, 39⁸において、Z.はまず、

(a) Of course, if they want to go, we cannot force them to stay.

May I request you to leave the room this instant?

の2つの例文をあげ、allow, command, force, order, permit, persuade, requestなどの動詞の後では「‘accusative’は普通先行の動詞の目的語とみなされうる」としている。しかし、Z.はinfinitiveが(直接)目的語であるかどうかは述べていない。

次に41において、

(b) I do not want (wish) you to stay here all day.

Would you like me to wait till she comes ?

I should prefer Jane to meet her tomorrow.

I hate to trouble you.

の4つの例文を上げ、「統語論的には、to want などの後の accusative with infinitive は、その 'accusative' が先行の動詞の目的語とはほとんどみなすことが出来ないという点で、to allow などのそれとは異なる。上の例で何が目的語か答えを求められたら、答えは、(you to stay など)不定詞付対格き全体であるに違いない」としている。

(a)類は他の言語でも acc. with inf. を使う点で一致しているのに対し、(b)類は他の言語では従属節を用いる違いも述べているが、両者を区別する根拠は、「Allow me to congratulate you から、分離した部分の意味を変えずに、Allow me を分離できる。しかし I like boys to be quiet は少年達を全然好かない人によっても言われるかもしれない。又 I hate you to talk like that は友達に対して言われるかもしれない」という事である。

しかし、Z. は両者を区別する根拠とは考えていないようであるが、統語論的にもっと興味ある指摘が48及び52においてなされている。(a)類には、

We were not allowed to visit the patient.

He was persuaded to withdraw his resignation.

のようないわゆる nominative with infinitive (不定詞付き主格)構造が起きるのに対し、(b)類はほとんどこの構造が起きえないということである。

この観点を加えてみれば、更にZ. が43において、

(c) I believe it to have been a mistake.

I declare this to be my firm intention.

Most people supposed him to be dead.

の例文を上げ、(b)類の動詞と「分析は大体同じである」とされ、別の一群とされている believe, declare, deny, imagine, perceive, suppose, understand などの動詞は、口語では普通従属節を用いる。又不定詞はほとんどいつでも to be か to have been で述詞名詞か形容詞 (predicative noun or adjective) が続くという根拠の外に、49において、

It is believed to have been a mistake.

He was supposed to be dead.

の如き nominative with infinitive-構造が起ることが指摘されていることに

なる。

4. Rosenbaum

R. の *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* (PCC) について注意しなければならない事は、1967年に出版された時の前書に、すでに、「明らかに動詞句補文構造 (verb phrase complementation) と考えられる場合の数はその全般的な存在が疑わしくなる程少なくなっている」等のいくつかの重大な修正が必要であると指摘されていることである。⁹ この書では(1)の基底部の句構造規則 (phrase structure rule)¹⁰ によってSが補文として深層構造に導入される7つの基本構造について考察したものである。

(1) $S \rightarrow NP \text{ AUX } VP$

$VP \rightarrow V(NP)(PP) \left\{ \begin{matrix} S \\ PP \end{matrix} \right\}$

$PP \rightarrow PREP \text{ NP}$

$NP \rightarrow DET \text{ N}(S)$

しかし、おそらく格文法の影響を受けて前置詞は全ての名詞に備わっている素性 (feature) と考え、構成素 (constituent) とは認めない、1968年の Jacobs との共著 *English Transformational Grammar* (ETG) では(2)の様な句構造規則になっている。

(2) $S \rightarrow NP \text{ AUX } VP$

$VP \rightarrow V(NP) \left\{ \begin{matrix} NP \\ S \end{matrix} \right\}$

$NP \rightarrow (ART) \text{ N}(S)$

(2)の句構造規則 によれば、(1)によって派生される補文構造の中から、自動詞斜格名詞句補文構造 (intransitive oblique noun phrase complementation)¹²、他動詞斜格名詞句補文構造 (transitive oblique noun phrase complementation)¹³ 斜格(他)動詞句補文構造 (oblique verb phrase complementation)¹⁴ が失われることになるが、ここでは主として、ETGによって議論を進め、例文はPCCなどによって補って行くことにする。

ETGにおいては(2)の句構造規則の展開によって、Sが導入されて、いわゆる不定詞付き対格構造になる場合は次の2つに限られている。

(a) Joan prefers (for) Peter to work at home.¹⁵

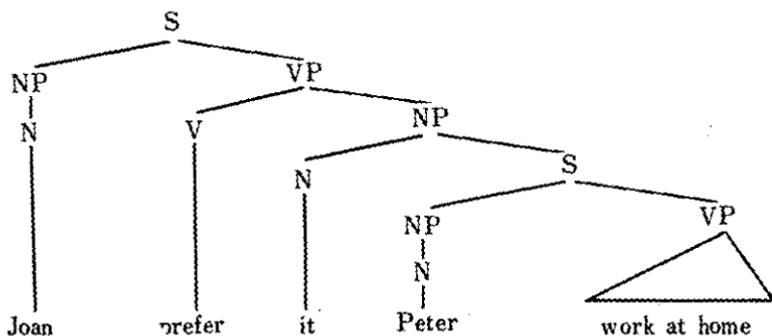


Fig. 1

(b) Guido tempted Daisy to adopt the rat.¹⁶

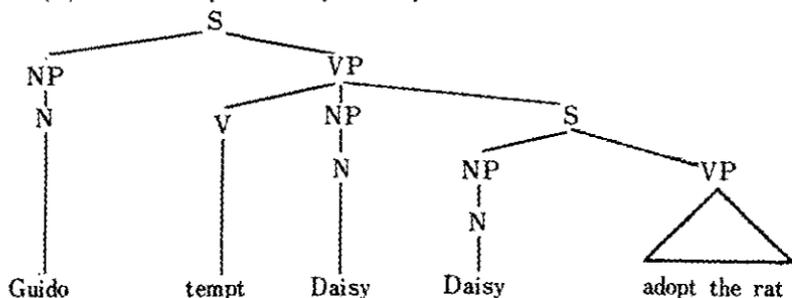


Fig. 2

これらはPCCにおいてそれぞれ(a)は〈他動詞の〉目的語名詞句補文構造〈objective noun phrase complementation〉と(b)は他動詞句補文構造〈transitive verb phrase complementation〉と呼ばれているものである。(a)に属する動詞はETGからはlike, prefer, want, 更にPCCからはdecide, dislike, hate, loveなど。(b)に属するものはETGではadmonish, defy, tempt, persuade, 更にPCCにはallow, bring, cause, compel, forceなどの数多くの動詞が上げられている。

R. による両者を区別する根拠は次の通りである。¹⁷

(1)受動文 (passive sentence) の可否。

(a) For you to come early is preferred by everyone.

(b)*For the doctor to examine John was compelled by me.

(2)外置文 (extraposed sentence) の可否。

- (a) Everybody prefers it very much for you to come early.
(b)*I compelled it very much for the doctor to examine John.
(3)(擬似)分裂文((pseudo-)cleft sentence)の可否。

- (a) What everybody prefers is for you to come early.
(b)*What I compelled was for the doctor to examine John.
(4)補文が受身になる場合の同義性。

- (a) We want Bill to be interviewed by the company と We want the company to interview Bill が同義であるのに対し、
(b) Nothing tempts Bill to be interviewed by the company と Nothing tempts the company to interview Bill は同義ではない。
(5)同一名詞句削除変形 (identical noun phrase deletion transformation) か再帰代名詞化変形 (reflexive transformation) か。

- (a) We preferred the doctor to examine John と
(b) We compelled the doctor to examine John の
2つの文において、the doctor の位置に主文の主語と同じものがくる時、次のようになる。
(a) We preferred to examine John.
(b) We compelled ourselves to examine John.
すなわち(a)は同一名詞句削除変形を受けるのに対し、(b)は再帰代名詞変形を受ける。

なお、(4)と(5)は同時に(b)類において主動詞のすぐ後の位置にくる名詞句を主文の目的語とする根拠となっているようである¹⁸。(4)の(b)の2つの文の意味の違いは Bill と the doctor という目的語の違いと解釈できるからである。又(5)の(b)については一般に再帰代名詞化変形はある動詞の目的語がその動詞の主語と同一の場合に適用されるからである。

次に believe, think, suppose などの動詞については、

- (c) I believe John to have convinced Bill という文が、
(1)(擬似)分裂文を持たない。

- *What I believe is for John to have convinced Bill.
(2)同一名詞句削除変形が適用されず、再帰代名詞化変形が適用される。
*I believe to have convinced Bill.
I believe myself to have convinced Bill.

これら2つの点からは(b)類の他動詞句補文構造に似ているが、

(3)補文が受身になる場合の同義性、

I believe Bill to have been convinced by John = I believe John to have convinced Bill を決定的な根拠として、深層では目的語名詞句補文、つまり(a)類と同一の構造を持つものとする。そして believe のような動詞が不定詞補文化詞〈infinitive complementizer〉を取る時、必然的にitあるいは代名詞置換変形〈it or pronoun replacement transformation〉を受けて、他動詞補文構造と同じものに変化すると考えている。

5. 考察¹⁹

最後に Rosenbaum を中心としてまとめを行い、若干の考察を加えることにする。

(1)先ず、*desire, dislike, hate, like, love, prefer, want* などの一群の動詞はいわゆる対格と不定詞が全体として目的語であり、深層構造においては目的語である名詞の補文句として挿入されたものであることは間違いないであろう。その深層構造は Fig. 1 の如きものと考えておく。

(2)believe, imagine, suppose, think などの動詞は Jespersen は単にその(a)類に含めていたが、その深層構造は(1)類と同じであっても、統語論上の行動の相違によって別個のものとする事ができるであろう。

しかし、believe の類は Appendix の B でみられるように、後に実際に「そうである」あるいは「そうであった又はそうした」内容を表す補文しか来ないとすれば、現在大いに議論されている presupposition の問題と関連して行くわけで、(3)(4)で考察するものとは勿論(1)とも根本的に異なった深層構造を持つものとされる可能性も考えられる²⁰。

(3)R. によればその他の動詞による不定詞付き対格構造は全ていわゆる他動詞句補文構造の場合になってしまう。しかし、この構造は彼の目的語名詞句補文構造との相違を明らかにしているにすぎないように思われる。すなわち4の(1)受動変形、(2)外置変形、(3)(擬似)分裂文変形のテストは不定詞付き対格を1つの単位として扱ったものばかりであり、対格と不定詞を別個の単位としたテストは行なわれていない。

更に、(4)の能動不定詞と受動不定詞との異義性と、(5)の同一名詞句削除変形が行なわれず、再帰代名詞化が行なわれることは対格が目的語であること

は示めしても、不定詞が直接動詞句に挿入された補文であることの決定的証拠にはならないと思う。この問題については、R. の提案した同一要素削除 (identity erasure) の原則の当否の議論に戻らなければならないだろう。

ここでは、次の(4)に述べるような見通しから、J. が(c)類にしたもの、Z andvoort が(a)類の中に入れたものである *compel, defy, force induce, persuade, tempt* などを典型的な例とする一群の動詞をあげておきたい。そして、その深層構造は、一応 R. の他動詞句補文構造、すなわち Fig. 2 の如きものと考えておく。²¹

(4)最後に J. が間接目的語+直接目的語と分析しているものについてであるが、現在の変形文法では、今井邦彦氏の「変形文法のはなし」の書き換え規則、²² $S \rightarrow NP VP$

$VP \rightarrow V(NP)(NP)(Adv)$

$NP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} N(\{NP\}) \\ S \end{array} \right\}$

更に *SinIti asked Kadzuko to meet the press* の深層構造の枝分れ図、²³

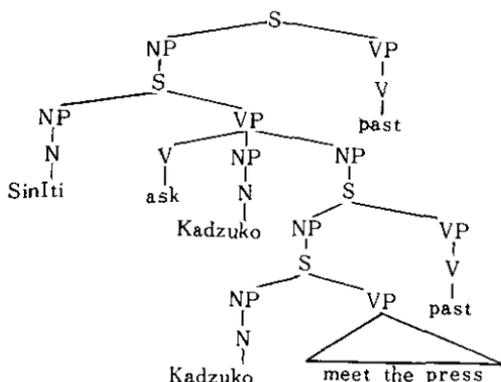


Fig. 3

にみられるように、この分析が、(これも又格文法の影響と思われるが)むしろ一般的なものかもしれない。実は P C C の他動詞斜格名詞句補文にはこのような分析の前段階であったと考えられる面があるし、現に E T G においても、 $VP \rightarrow V NP NP$ の中の一方の NP が更に S を含んでいる場合の深層構造から生ずる不定詞付き対格構造が取り上げられるべきであったと言える。そ

してこれを I told him to go there の深層構造と考える。²⁴

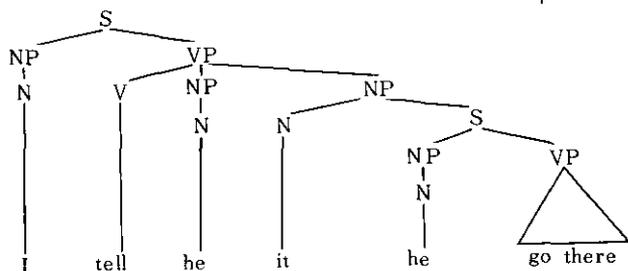


Fig. 4

ここでは、command, order, tell; ask, beg, demand, request; allow, permit などを典型的な動詞と考えておきたい。²⁵

Appendix A. ²⁶

- | | | | | | | | | | |
|----------|-----------|--|----------|--|--------|--|----------|--|--|
| 0.1 | Mary | <table border="0"> <tr><td>○ wanted</td><td> </td></tr> <tr><td>○ told</td><td> </td></tr> <tr><td>○ forced</td><td> </td></tr> </table> | ○ wanted | | ○ told | | ○ forced | | (for) John to strike the boys. |
| ○ wanted | | | | | | | | | |
| ○ told | | | | | | | | | |
| ○ forced | | | | | | | | | |
| 0.21 | Mary | <table border="0"> <tr><td>○ wanted</td><td> </td></tr> <tr><td>× told</td><td> </td></tr> <tr><td>× forced</td><td> </td></tr> </table> | ○ wanted | | × told | | × forced | | that John (should) strike the boys. |
| ○ wanted | | | | | | | | | |
| × told | | | | | | | | | |
| × forced | | | | | | | | | |
| 0.22 | Mary | <table border="0"> <tr><td>× wanted</td><td> </td></tr> <tr><td>○ told</td><td> </td></tr> <tr><td>× forced</td><td> </td></tr> </table> | × wanted | | ○ told | | × forced | | John that he (should) strike the boys. |
| × wanted | | | | | | | | | |
| ○ told | | | | | | | | | |
| × forced | | | | | | | | | |
| 1.11 | What Mary | <table border="0"> <tr><td>○ wanted</td><td> </td></tr> <tr><td>× told</td><td> </td></tr> <tr><td>× forced</td><td> </td></tr> </table> | ○ wanted | | × told | | × forced | | was (for) John to strike the boys. |
| ○ wanted | | | | | | | | | |
| × told | | | | | | | | | |
| × forced | | | | | | | | | |
| 1.121 | What Mary | <table border="0"> <tr><td>× wanted</td><td> </td></tr> <tr><td>○ told</td><td> </td></tr> <tr><td>× forced</td><td> </td></tr> </table> | × wanted | | ○ told | | × forced | | John was to strike the boys. |
| × wanted | | | | | | | | | |
| ○ told | | | | | | | | | |
| × forced | | | | | | | | | |
| 1.122 | What Mary | <table border="0"> <tr><td>× wanted</td><td> </td></tr> <tr><td>○ told</td><td> </td></tr> <tr><td>× forced</td><td> </td></tr> </table> | × wanted | | ○ told | | × forced | | John was (for) him to strike the boys. |
| × wanted | | | | | | | | | |
| ○ told | | | | | | | | | |
| × forced | | | | | | | | | |

- 1.21 What Mary $\left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{wanted} \\ \times \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ was that John(should) strike the boys.
- 1.22 What Mary $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \bigcirc \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ John was that he (should) strike the boys.
- 2.111 For John to strike the boys was $\left\{ \begin{array}{l} \triangle \text{wanted} \\ \times \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ by Mary.
- 2.112 It was $\left\{ \begin{array}{l} \triangle \text{wanted} \\ \times \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ by Mary for John to strike the boys.
- 2.1211 To strike the boys was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \triangle \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ (to)John by Mary.
- 2.1212 It was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \triangle \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ (to)John by Mary to strike the boys.
- 2.1221 For John to strike the boys was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \triangle \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ (to)him by Mary.
- 2.1222 It was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \triangle \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ (to) John by Mary for him to strike the boys.
- 2.211 That John (should) strike the boys was $\left\{ \begin{array}{l} \triangle \text{wanted} \\ \times \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ by Mary.
- 2.212 It was $\left\{ \begin{array}{l} \triangle \text{wanted} \\ \times \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ by Mary that John (should) strike the boys.
- 2.221 That John (should) strike the boys was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \triangle \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ (to)him by Mar
- 2.222 It was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{wanted} \\ \triangle \text{told} \\ \times \text{forced} \end{array} \right\}$ (to) John by Mary that he (should) strike the boys.

「不定詞付き対格」の深層構造について

- 3.1 John was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \bigcirc \text{ forced} \end{array} \right. |$ by Mary to strike the boys.
- 3.2 John was $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ by Mary that he should strike the boys.
- 4.1 Mary $\left\{ \begin{array}{l} \triangle \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \bigcirc \text{ forced} \end{array} \right. |$ (for) herself to strike the boys.
 $\left. \begin{array}{l} \times \\ \times \end{array} \right\}$
- 4.21 Mary $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{ wanted} \\ \times \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ that she (should) strike the boys.
- 4.22 Mary $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ herself that she (should) strike the boys.
- 5.1 (a) Mary $\left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{ wanted} \\ \times \text{ told} \\ \bigcirc \text{ forced} \end{array} \right. |$ (for) the boys to be struck by John.
 $\left. \begin{array}{l} \times \\ \times \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} a = b \\ \hline a \neq b \end{array} \right.$
- (b) Mary $\left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \bigcirc \text{ forced} \end{array} \right. |$ (for) the John to strike the boys. (0.1)
 $\left. \begin{array}{l} \times \\ \times \end{array} \right\}$
- 5.21 (a) Mary $\left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{ wanted} \\ \times \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ that the boys (should) be struck by John.
 $\left. \begin{array}{l} \times \\ \times \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} a = b \\ \hline \hline \end{array} \right.$
- (b) Mary $\left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{ wanted} \\ \times \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ that John (should) strike the boys. (0.21)
- 5.22 (a) Mary $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ John that the boys (should) be struck by him
 $\left. \begin{array}{l} \times \\ \times \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \hline a = b \end{array} \right.$
- (b) Mary $\left\{ \begin{array}{l} \times \text{ wanted} \\ \bigcirc \text{ told} \\ \times \text{ forced} \end{array} \right. |$ John that he (should) strike the boys. (0.22)

Appendix B.

0.1	Mary	<input type="radio"/> believed <input type="radio"/> wanted <input type="radio"/> told <input type="radio"/> forced	John to be honest.
1.1	Mary	<input type="radio"/> believed <input checked="" type="radio"/> wanted <input checked="" type="radio"/> told <input checked="" type="radio"/> forced <input checked="" type="radio"/>	that John was honest. (信ずる)
1.2	Mary	<input type="radio"/> believed <input type="radio"/> wanted <input checked="" type="radio"/> told <input checked="" type="radio"/> forced	that John (should) be honest. (思う) cf. A U
1.121	Mary	<input checked="" type="radio"/> believed <input checked="" type="radio"/> wanted <input type="radio"/> told <input checked="" type="radio"/> forced	John that he was honest (告げる)
1.122	Mary	<input checked="" type="radio"/> believed <input checked="" type="radio"/> wanted <input type="radio"/> told <input checked="" type="radio"/> forced	John that she (should) be honest. cf. A0. (命ずる)
2.	Mary believed John	<input checked="" type="radio"/> to strike <input type="radio"/> to have struck	the boys.
3.	We believe Mary	<input type="radio"/> to admire <input checked="" type="radio"/> to strike	her mother.

注

1. 本稿は、日本英文学会北海道支部第16回大会(1971年10月2日、北海道大学)において口頭発表したものに加筆修正をほどこしたものである。
2. 直接的典拠となった著書はない。さまざまな人々との議論あるいは英文法書(特に大学程度テキスト)などからの推測である。
3. しかし、高等学校のテキストであるThe Concise English Grammar and Writing, 2(三省堂)においては先に述べた分析の一部が正式に取上げられている。この取扱い方に対する疑問を投げかけられたことが、本考察の動機の一つである。
4. p. 339~400.
5. p. 279.
6. p. 280~292.
7. なお、Essentials, 32.44(p. 340) 参照。
8. 本書は丸善より、数版にわたり出版されているが、微妙に記載ページが異なるため、以下section number を上げ、ページ指示の代りとする。
9. p. ix 参照。

「不定詞付き対格」の深層構造について¹

10. p. 1. ただし、梶田優著「変形文法の最近の動き」(英語教育、15巻、8号、p. 21)を参考にして、PDP及びADVを省略し、PPを展開した。
11. p. 57. ただし、VBは単にVに変え、更にNP→NP Sは省いた。
12. beg, decide, wish は後述の(a)類に属すべきものであり、その他附録に上げられている動詞は「不定詞付き対格」の構造は取れない。なお Masaru Kajita : *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English* 参照。
13. 後述5の(4)類に関する項参照。
14. 後述の(b)類に属することになる。
15. 例文はETG、p. 193. 深層構造図はAUXを省略するなど(b)との対話比を示めしやすいうように配慮した。
16. 例文はETG、p. 194. 深層構造図については注15と同様。
17. 以下の記述は梶田氏の前掲論文に負う所が大きい。なお、例文は筆者が問題点を明らかにするために変えたものもあり、特に典拠を示さない。
18. 梶田氏の前掲論文(英語教育、15巻、9号、p. 23)参照。
19. 全般について Appendix を参照されたい。特にAは(3)と(4)の区別を示唆を与えていると思われる。
20. 「新言語学辞典」、stative の項(p. 434~438)参照。なお、choose(elect select) someone to be chairman のような構造は本稿の分類のどれにも当たらないのではないかと考える。
21. 口頭発表の後に入手した *Transformation, Style, and Meaning* には(他)動詞句補文構造は取り上げられていない。本書はETGよりも更に入門的であるためか、この立場を捨てたのかは不明。なお、「新言語学辞典」、complement の項(特にp. 77)参照。
22. 「英語教育」19巻、5号、p. 74.
23. 「英語教育」19巻、7号、p. 70.
24. ただしETGにおいては、いわゆる間接目的語は、深層構造で動詞句に支配される2番目のNPである。
25. promise については特別な、扱いをしなければならないのは言うまでもない。
26. informant は北星学園大学文学部、Wesley Richard 氏(米人、言語学専攻)可は○不可は×、合文法的であり、「言えないことはないが普通は言わない」と答えたものを△×とした。なおfor, to 及びshould の()は「あってもなくてもよい」こと、for に関する×は「あってはならない」ことを表わす。Aは1.分裂文、2.受動文(更に外置文が重っている)、3.いわゆる不定詞付き主格文、4.同一名詞削除か再帰代名詞化か、5.受動不定詞付き対格の同義性をそれぞれテストした。参考のためthatによる補文構造を持つ文を付した。believe は5の(2)で述べたような理由で、有意な結果をもたらさなかった。Bは5の(2)の後段の記述を示唆するにとどまる。

参照文献

- 今井邦彦、「変形文法のはなし」英語教育、19巻1号~20巻6号。大修館。1970, 1971。
- Jacobs, R. A. and Rosenbaum, P. S.; *Grammar 1. 2. 3. 4.* Ginn. 1967, 1970.
- ; *English Transformational Grammar.* Ginn-Blaisdell. 1968.
- ; *Transformations, Style, and Meaning.* Xerox. 1971.

Jespersen, Otto; *Essentials of English Grammar* (1933). George Allen and Unwin. 1961.

——; *A modern English Grammar, Part 5* (1940). George Allen and Unwin. 1959.

梶田優、「変換文法の最近の動き」英語教育、18巻9号～11号。大修館。1966, 1967.

Kajita, Masaru; *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English* (1967). Sanseido. 1969.

Rosenbaum, P. S.; *The Grammar of English Complement Constructions* (1965). M. I. T. 1967.

——; “A Principle Governing Deletion in English Sentential Complementation” (1965). Ginn. 1970.

——; “Phrase Structure Principles of English Complex Sentence Complementation” (1967). Prentice-Hall. 1970.

——; *Specification and Utilization of a Transformational Grammar* (1967). International Business Machine Corporation.

安井稔(編)、新言語学辞典。研究社。1971。

Zandvoort, R. W. *A Handbook of English Grammar*. Maruzen. 1960, 1963, etc.

Studies in the Refractions found in the New Testament Translations (6)

Kunio KATO

Presupposing the necessity of linguistic study of the Old Testament written mostly in Hebrew, partly in Aramaic, the writer can not help to find so-called 'refractions' in New Testament Greek words, especially when the New Testament were translated into many languages, e. g. Latin, German, French, English and Japanese, in these versions. In this paper the writer tries to investigate whether 'Basileia' in Greek was 'refracted' in these translations or not. Malkuth (Hebrew) or Malku (Aramaic), originated from 'Melek' (king), meant primarily kingly sovereignty, rule and then kingdom. The writer does not know whether Malkuth or Malku could be translated, in the perfect sense, into Basileia (Greek) or not. But it is certain that Basileia meant something more than a kingdom in English.

In the Vulgate Basileia was translated into Regnum (Latin). It may be said that Regnum may be the exact equivalent of Basileia.

Though Martin Luther translated Malkuth and Malku, in his Bible, into some kinds of German vocabularies, generally speaking he translated Basileia into 'das Reich'. In the Authorized Version, Malkuth and Malku were translated into many English words, but Basileia was unexceptionally translated into 'kingdom'. In the Japanese translation, Malkuth, Malku, and Basileia were translated, in many cases, into 'Kuni'. But there may be a possibility 'Kuni' can be understood to be 'Kokudo', a land.

The Peshitta, the Syriac New Testament translation, is perfectly exact in translating 'Basileia' into Syriac 'Malkutha' which apparently derived from Hebrew Malkuth or Aramaic Malku.

On the Deep Structure of 'Accusative with Infinitive' Constructions

Rikiya KATO

The underlined parts of the following sentences are traditionally called "accusative with infinitive" constructions;

1. I want *him to go*.
2. I believe *him to be honest*.
3. I forced *him to go*.
4. I told *him to go*.

But they can be given different analyses in terms of their preceding verbs.

First, the author surveys the views on this problem of two traditional grammarians--- O. Jespersen and R. W. Zandvoort--- and a transformational-generative grammarian, P. S. Rosenbaum. Then, by assigning tentative different deep structures to these constructions, he tries to classify into four classes the verbs which can take accusative with infinitive constructions.

Prospero — his fatherly love

Shozo TAKAHASHI

This essay, as the second essay following the first essay 'Ariel and Caliban in *The Tempest*', aims to make clear Prospero's fatherly love toward his daughter Miranda. There are four aspects; Miranda as a treasure, Fair encounter and Prospero's test to Ferdinand, Prospero's ethic and warning about life, and Prospero's pathos as a father. Through thinking upon these aspects some imagination will occur in our minds that Shakespeare, as one who had two daughters, may have been such a father.

From Japanese to English: An Error Prediction Based on a Transformational Model.

Wesley RICHARD

The question of how to predict language interference in a second language learning situation has long been debated. With the emergence of transformational grammar it has become possible to formulate grammatical rules of the two languages in question in order to make comparisons. It appears to be possible to construct a base grammar, incidently common to both languages, from which transfer rules can be used to get from a Native Language Base to a Target Language surface structure. By calculating the number of rules required to get from a structure in the native language to a similar structure